

700
8
2145

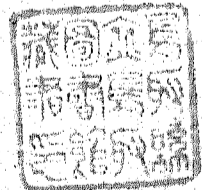
九十號二

十二冊之內

伯耆志

會見郡八

采子之下



7/18

毎歳米十二俵と賜ふ

善光院 同上

十方院 同上

延命院 同上

寛亀山法藏寺 曹洞 瑞仙寺末

本尊観音

所謂十八町々 博勞町 新町或作 道笑町或作 日野

町 茶町 塩町 大工町 法勝寺町或作法性

紺屋町 四日市卑 東倉吉町 西倉吉卑 尾高

町 岩倉町 笠町 灘町 横町 内早 天神町

旧名片原町安 變四年改今名 あり町中官許の姓三十二家其中旧

家四氏及云他の数家の伝を尋く遺満す。所々他

日補多登

村川氏 官許之姓 本國尾張より先祖八山田太郎と云

云原氏云傳ふ太郎の後山田二郎左衛門正齊

東照宮に仕立て久松氏に属して天正九年四月罪と

獲り大阪より自發す子正負母ハ本号氏の臣守川六
郎九衛門友正の女なり正育死して後母子流浪し
て当地より東に正負外家の姓に取て村川甚兵衛と
号れ子甚兵衛正賢其子市兵衛正能安信氏四郎当
國の権使より入國の時大吾氏と共に竹島渡海
の旨に請ふ竹島の事委しくハ大吾氏の下時より元
和三年あり明年兩人江戸に至り安信氏の館より
因り右の旨に上聞し達す五月十六日渡海の御免
状に賜はる

後伯耆國米子竹島は先年船相渡之申越者如其

今度致渡海度之波村川市兵衛天屋甚吉申上付
而達

上聞候之処不可有異儀之旨被仰出候間被得
其意渡海之儀可被仰付候恐く謹言

永井信濃守

尚政判

五月十六日

井上主計頭

正就判

土井大炊頭

利勝判

酒井雅樂頭

忠世刊

松平新太郎殿

家系此も聞召し此登宮の命有る、台意公と拝諾
し時服は賜。又御飲の船印幕枕灯及公槍手鉾鏡
炮等と許し、元寛永二年安倍氏の手書あり

五月十一日之御座札十月七日ニ奉着具く披見
兼出雲紙拾束贈賜遠路御志之程別而今満足候
然者竹嶋、渡海之儀当年者建引之由尤、存候

如来意小嶋之儀ニ候間年々隔被相渡可然候將
又当年御上洛も候し、出京ニ而御礼可被申上
処ニ尤無之ニ付而私慮之由無余儀共ニ候来
年於御上洛者被罷上御年寄中へ被懸御目候儀
外更共肝要之至ニ候事、期後度之時候恐レ謹
言

十月七日

安倍四郎五郎

正之花押

村川市兵衛殿

大屋九右衛門殿

大谷氏其頃大屋と云々、明年 大猷公御上洛の
時市兵衛上京して拜謁す桐木竹嶋串鮑等以献
又安倍氏の昏行

好便之間一筆令申候然者今度於京都進上仕度
之首被申候桐之木串鮑去月土井大炊頭及所被
露被成一段首尾能上り申候竹嶋 口波海様子之
も委 御尋並残所仕合候条此旨可申遣由大
炊頭及被仰渡候条如斯候御披露之切則小濱氏
部方へ申遣江戸 田村世候得也 上意付而
小濱氏部方へ申越其御請も疾者著候之間満足

可有候片便宜故令省略候委細者期後慶之時候
恕く謹言

霜月十五日

安倍四郎五郎

名花押

村川市兵衛殿

泰

寛文十五年二月竹島梅粗以献江户西御九郎書
棚御書院床の料多し

一書申入候其地へ被泰候付串鮑三百入一箱持
泰之由苗主居之者共方多し 日光へ申越候心付

之通祝普申候尚追而可申候間不具候恐惶謹言

五月六日

松平右衛門大夫

正綱花押

追而申入候御目見之後ハ伊豆方江申入候以上

村川市兵衛左

奉

今朝者能時分ニ御出伊豆守首尾能御達一段候
ニ御座候我等所ノ御見舞殊更鯉節一箱百入預

御持恭奉存候為御礼如此ニ御座候恐惶謹言

九月十六日

小島助右衛門

村川市兵衛左

人ノ御中

小島氏ト伊豆守殿ノ屋敷ノ年記詳カシク

為歲暮之御祝儀過朔日之御込殊手拭五入一箱
贈給過分至候御手前無事御入候由目出度珍重
候我等儀ト無恙有之事候將又御紙面之通四郎

五郎可申候来春竹島へ渡船六月中者可有御
奉勤首万度其節可申承候思へ謹言

大久保宮内少輔

十二月十七日

正朝花押

村川市兵衛様

御返事

是六年記詳なり

- 一 百合草 二三十粒程
- 一 にんじく サレ

- 一 大竹五本長三尺程花ソ付し成候梯成
- 一 大桐 二本
- 一 桐之木衆物棒長三間程若有之者御回
- 一 せんじんの板 三枚長一間
- 一 せんじく寸有之者一本ニ而も

右之材木者大坂肥後嶋□屋清三郎方迄御届
可被下候清三郎方へも此段申付候

一 層状二者書不申当年九右工門及被奉候間未
年者貴娘御越者御無用候明く年御越可然り
と被申候然共御勝手次第可被成候八九年之

間々御越候得者能御座候

一四郎五郎并拙者名口書自然竹島一之用之儀

申遣者可有之候必承引被仕間敷候此限九右

方口今度直ニ堅申渡候以上

六月二日

龜山庄左工門

判

村川市兵衛様

又何の事れ知難し

寛永中家僕竹島より帰帆の時朝鮮へ漂流し彼國

人對馬へ送致對馬侯より本府への書左り如し

一書令啓候然者 庄五郎及御領分伯州之内米

子村之村川市兵衛代官孫三右衛門竹島渡海仕

用所相仕回六月之末伯國之刊被致凡朝鮮國之

内蔚山之浦漂流仕候処日本人故於朝鮮表別而

念被入此方へ被相送候糸彼跡三右工門与七郎

ニ我等者相添送遣候委曲浪川次兵衛可申入候

間不能一二候恐々謹言

宗對馬守

八月廿六日

名花押

荒尾内匠及

忝

尚以庄五郎俊卿在江戸之田承候故江戸、此
等之通直ニ申達候朝鮮ニ而之馳走之様子者
彼弥三右卫門与七郎定而可申入候

寛永十四年肥前嶋原の一撥追討ニ松平伊豆
守殿発向の時市兵亦大谷氏渡海して彼陣所ニ
赴き灼陣の時七坂ニ至りて帰る正保二年九月江戸
ニ至り登管して并謁す献す於所梅根枝二枚桐二
本正純の子市兵所正清明曆三年登管す竹島鮑五

百と献す寛文五年六月登管献す。所前度と同
天和二年十二月米子入津の塩込当家ニ管す今猶
然正清の子市兵所正勝元禄二年六月登管す献
物先代と同し同七年竹嶋ニ渡海せし。若干の朝
鮮人上陸せし即灼帆して官ニ達す同八年命以得
て渡海凡朝鮮島中ニ満り其兩人以捕へ灼て官
ニ訴ふ大谷氏の
下ニ詳し同九年竹島渡海御制禁所也

先年松平新太郎因州伯州領知之節相窺之伯州
米子之町人村川市兵所大屋甚吉竹島ニ渡海至
于今雖致澳候向後竹島ニ渡海之儀制禁可申付

昔被 仰出之後可被存其趣候恐く謹言

土屋相模守

政直

正暦廿八日

戸田山城守

忠昌

阿部豊後守

正武

大久保加賀守

忠朝

松平伯耆守俊

享保九年四月江戸の命有て本府に至り竹嶋渡海
の始末に官に言上す奥禅公の時より御在府の年
ハ彼地より拝謁し脚紋の時服上下惟子等度し賜
ハ里又脚紋の挑灯路次の印符に賜り然るに彼
業廢してより家産衰へ諸事自然中絶して今に至
り数々の旧記等往年の火災し失せ去り

大谷氏 官許之姓

本姓和田より天正の頃福島氏に仕

登木曾三千貫の地を領す故有て去て但馬大屋吉
に居るより此に丸右衛門良清を云ぬ良清の子瀬兵
衛永順と云ふ其子玄蕃実真尾高城主杉原氏に招

り水々彼地より来り姓代大旨より但馬の本居り因
水亦あり父永順又彼地より来り永祿中没す源光寺
に墓あり故原氏亡後其後実真再但馬より歸り元和
二年没す二男一姪あり長ハ九右工門勝宗次ハ兵
左工門下より云ハ別家の祖
あり姪ハ甚吉也云ふ 共り米子より来り遠近より渡海して運送
を業より同三年甚吉越後より伯耆の時漂流して
竹島より至り此島を隱岐の西北百里許朝鮮國より五
十里と云あり周回十里許當時人家無くして山海
産物有り喬木大竹繁茂禽獸魚貝其品を尽す鮑
中鮑を獲り夕より竹の海に投り朝より此の上れ

ハ彼鮑枝葉より著り事木子の如く其味又絶倫あり
志々かや甚吉灼り当府の檢使安倍氏より彼越後達
し以後渡海せんと請ふ安倍氏即江戸より紹介して
奉書あり寺川氏の系
見合に也 当時村川氏当家と同じ
く安倍氏の懇命あり故り兩家より命せられ然
れども竹島渡海の隘路を当家より在り事上の如し
勝宗猶士氣あり存す故り大旨と縁せられし大屋以
号り是又本居り
因れり那也 彼甚吉河より事代執りし後
甚吉竹島より没す故り故り止む事あり得り大屋九右
工門の名に以て業を継ぐ亦来り江戸登宮其他の事

村川氏の条と全く同一故に教通の昏別義ありきと
一水公略に多く村川氏と年番に江戸に至り

卯月三日之未札披見今度惣助罷下遂面談候所
其方違者候得共眼病疑之由申付此度元服
為致九右工門と名改御老中江も差出過廿八日
首尾能致 御目見候間難有異大慶可有之候委
細ハ惣助可為演説候且太下緒一具贈給欣然之
至候哉等儀も一服父子共毎事在候間可御心安
候竹嶋江之用事惣助ニ書付申談候猶期後音候
恐々謹言

安倍四郎五郎

六月二日

名花押

大屋九右工門格

尚以惣助爰元ニ切り代ニ之名九右工門と申
上候間其方名改替後ニと休息可然委細ハ惣助
ニ申合候以上

四月三日之一翰令披見候然者貴爰候病氣ニ付
而為名代同姓惣助御下候同苗四郎五郎肝煎ニ
而首尾克御目見被仕候間可有恐悦候隨而下緒
大小一具贈給忝存候將又我等一類共堅固相勤

候猶期後音之時候恐々謹言

安倍忠右工門

五月晦日

正美花押

大屋九右工門様

猶々惣助儀生付能御手前仕合と我等兄弟共壽
合申事候可有御満足候以上

正月八日別紙之御状令披見候去冬首尾克
公方様 御目見難有被存候昔尤候我等儀も弥
無事有之事候来春竹嶋へ船被相渡候旨無事着
岸之尤右可承候材木之儀ハ兩人ハ之旨状申達

候□重而ハ子息御目見可被指越之由令承候一
段可然候無氣遣御越可有之候猶期後音候恐々
謹言

安倍四郎五郎

正月晦日

名花押

大屋九右工門様

御返報

右何々年紀詳外ハ二代の九右工門勝実と云
り寛文六年竹島々々 御帆の時朝鮮国釜山浦へ漂
流し漸く彼國々々陸才國王對馬へ送る時食糧と

給予其目錄二通今藏寸

漂倭處別贈

頭倭一人

白米貳斗

白紙貳卷

從倭二十一名

白米各壹斗

白紙各壹卷

丙午九月日

文字雜詠

巡察

右一通

漂倭二十二名

白米拾肆石拾斗

大口魚壹百拾尾

清酒貳拾貳瓶

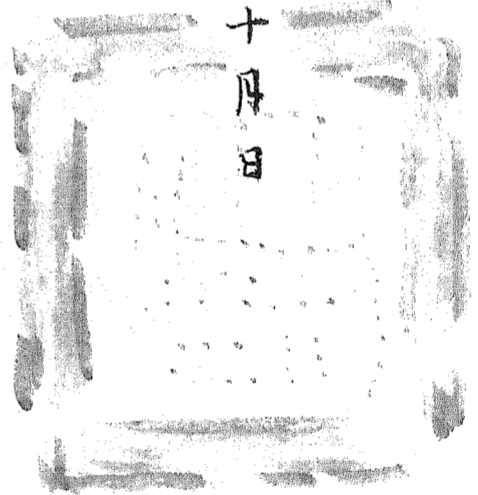
東菰貳拾貳塊

生鮮貳拾貳束

甘醬陸斗陸升

際

丙午十月日



是六維読

右一通

一筆申入候大屋九右衛門當夏碓竹^口渡候船之
外一艘朝鮮國^口被放船者破損候得共人八損不
申釜山海^口宗對馬^口送届候由對馬^口
殿様大坂御屋敷迄申来候右之様子對馬^口

り言上之上^口以重て御左右可在之^口聞へ申候
間追付様子可相聞候^口異儀罷^口而可在之候
右之者共妻子行未不存款君可申候間右之趣被
仰聞候^口安堵可申候此通大屋^口可申度候恐
く謹言

荒内匠

名花押

十一月廿二日

坂川分左工門^口
大股多左工門^口

磯竹古竹島あり三代九右衛門勝信云云竹島の
東に周回二十丁許の島あり松島と呼ぶ隠岐と
り六十里余あり(海) 嚴有公の時彼安倍氏の紹
分より此島に賜ふ竹島と同(海) 海麻與油取れ
り四代九右衛門勝房七歳より父没す別家藤兵
治某假に九右衛門と改名し参府す(海)の命有る
元禄七年三月江戸に至り登官す時服と賜り(海)今
別家の重宝より同八年竹島に渡海せし朝鮮又
上陸す品者若干あり其情測る(海)且人数も
多し(海)此島に泊りて官に達す明年命を得て武備

松裁せしに至り朝鮮人彼島の大坂浦に遁る者
二人あり即ち此島に捕へ歸航して又官に許す命有
り藤兵治異人其具して本府に至る番士加納氏尾
関氏守護し(海)異人江戸に召され本土に送る(海)
後彼國より竹島を朝鮮の地と爲り(海)頻りに言上し
及ぬ官議して日本管内(海) (海)旨證文以上(海)
以後朝鮮に預け給ふ可きの命あり彼國より(海)奉
以因て当家渡海の初より七十八年(海)禁制せ
し(海) 当時榎氏の一系より官外事と省
(海)事能く(海)遂に(海)至る(海)云(海) 当家数日
異人に置し一室三十年迄に存せし(海)云(海)名勝房

従来の家産以失ぬる故に去て出雲に去りし本
府の外命は因て殆ど城下奥島買賣の管して業
々今猶然り大廣公の時本府登 城拜謁と許は
る以前より御在存の年彼
地より拜謁せしあり

大谷九右衛門

其方儀御在國之節年頭

御目見願之通被 仰付候

子 八月廿二日

又何の時も也時服上下等は賜りし本府に至り拜

謝せし時尤の旨は賜りし

今度時服被遣為御礼当地被冬由、而前刻者入

来塩鮑一釜給令満足候令他出不能面談候將又

過日者磯竹百合草葉花入竹筒令祝著候恐る謹

言

七月晦日

名花押

大屋九右衛門及

荒志摩

元文中勝房江戸に至り願ふ事あり是を長崎貫物
割符同屋の数に加りしとあり官の外命を得て
長崎奉行に願届は達はれども許容無し又上野官

し依り本府に懇願す是を其母父藤八徳田主水に
改号して京都に住し冷泉家と過り冷泉家上野官
の御姪父の孫又櫻井三位殿の妹江戸の女官より
其姪松平大和守殿の母あり主水の姓より是所の
徳田氏大和守殿より由縁あり此は原書故と以下櫻
井家冷泉家の旨は得る上野官より事は違せしもの
なり寛保元年十二月官の坊官より本府の御宿坊
より旨は違す往復数度あり延享元年始國す明年四
月本府より御書と賜りし

其方儀上野官様被為為添御言葉候被成御美

知候其旨相心得可申候

後又江戸に至て余は候より長崎貫物問屋拳錯年
限何れか以下は許されは勝房当時米子町の
役人より公用有て召違ふ事又本府せんと候し
果されしに死守室曆四年あり亦未諸事は傳せ凡
本府登城も自然に中絶し今に至る迄云々
原書大屋と大吾姓より傳せし事と脱出凡

官本氏官許之姓

本國大和より菅原姓あり昔攝受類

通公春日社より大和四箇荘に附せしれ大膳亮菅原
永家松柳生の地頭より彼神領の奉行とせし事